

海外出張報告

The 13th Conference of the International Society on Veterinary Epidemiology and Economics 出席

出張期間：2012年8月19日～9月1日
出張場所：オランダ・マーストリヒト市 MECC ならびに
ベルギー・ゲント市 Het Pand

KOBAYASHI Sota
ウイルス・疫学研究領域 主任研究員 小林 創太

International Society on Veterinary Epidemiology and Economics (以下、「ISVEE」とします)が3年に一度開催する学術集会(以下、「ISVEE conference」)は、獣医疫学分野における世界最大の国際学術集会です。今夏、第13回 ISVEE conference がオランダとベルギーの共同開催で、2012年8月20～24日の5日間にわたり、オランダ・マーストリヒト市で開催されました(写真1)。また ISVEE conference は、会期前後に行われるワークショップも充実しており、今回も Pre-、Post- 合わせて10以上のワークショップ(内容によって2～5日間)が、ベルギーはゲント市にて開催され

ました。この度私は、この集会に参加する機会(発表演題: Impact on the productivity of dairy cattle by the subclinical infection to bovine leukemia virus)に恵まれましたので、本稿ではその模様について、所感を交えて報告します。

今回は、70か国、750名以上の著者から1,100題に迫る提出演題があり、366題の口頭発表、699題のポスター発表が受理されたとのことでした。口頭発表は連日5つの異なるセッションが並行して進められ(セッションは合計40種類以上)、ポスター発表は内容によって12のカテゴリに分類され、カ

テゴリごとのコアタイムにて、他の参加者と議論がなされました。

私は、今後我が国でも検討の余地があると思われる「リスクに基づくサーベイランス」に関する Post-conference workshop (8月26～30日)にも参加することになっていたため、集会本体でもサーベイランスに関するセッションを中心に参加しました。トピックとしては、個別疾病対策とその手段の一つとしてのサーベイランスについての内容的なことはもちろんのこと、サーベイランス対象疾病の優先順位づけの考え方、疾病の報告体制のあり方、疾病侵入に対するリスク



写真1. オープニングセレモニー
今回のISVEE conferenceのロゴをバックに、パーカッション隊の演奏が花を添えた

分析、農場のバイオセキュリティ、と畜場検査、経済分析、またサーベイランスの前提となる診断検査の評価手法に関する最新知見、政策と調査研究の関係についての提言をまとめた発表などから、非常に多くの刺激を受けました。個々の演題の紹介は割愛しますが、レベルの高さがうかがえた報告はいずれも、疫学に限らず分野あるいは疫学の「分野内分野」とでもいべき横断的チームの存在が、発表者の背後に明確に感じられたことが印象的でした。個は個で責任を全うしつつ、チームとしての研究を進めていくことの重要性を再認識しました。一方、国家レベルの疾病対策において、科学的知見を実際の運用の場に移行させる際の苦慮ともいべきものは、各国の疫学者が持っている共通認識であり、研究の方向性と関係行政当局とのコンセンサス形成についての考え方は大きな参考になりました。

疾病別のセッションでは、今回は口蹄疫、高病原性鳥インフルエンザといった国際的に関心の高い感染症はもちろんのこと、欧州開催ということもあり、結核、ブルータンダ、あるいは昨年来問題となったシュマレンベルクウイルス（こちらはミニシンポジウムでしたが、九州支所の梁瀬徹主任研究員らの報告が、EFSA（欧州食品安全機関）担当者の発表中でハイライト付きで引用されていたことを強調しておきます）や、公衆衛生分野からは抗生物質使用と耐性菌の問題、腸管出血性大腸菌やサルモネラが大きく注目されていました。さらに、跛行、乳房炎といったより家畜臨床に近い疾病の疫学や、家畜・家きんのみならず、野生動物、養殖魚介類をはじめとする水棲動物や、小動物も含めた動物種別毎に独立したセッションも設けられていました。これらは、獣疫学が動物関連の分野で国際的に広く貢献していることを端的に示しています。この点については、近年我が国の獣医系大学において獣疫学に関連する専門講座が続々と開設されていることに



写真2. 2018年の第15回conference開催国となったタイの農業・協同組合省畜産振興局スタッフとともに（左から2人目が今回代表を務めたDr. Thanawat Tiensin、3人目が筆者）

注目すべきでしょう。今回、帯広畜産大学、酪農学園大学、東京大学、宮崎大学から、また日本国外で活躍する若手獣疫学者の参加もあり、結果的に日本人発表者が10名に迫る状況でした。この事実は、国際的にはまだまだ小集団ではあるものの、我が国の獣疫学にとって、これまでの ISVEE conference からの大きな進歩として特筆すべきことです。今後彼らが、また彼らの講座等から巣立つこととなる関係者が、我が国の家畜衛生はもちろんのこと、様々な分野でプレゼンスを増してくることは容易に想像できることであり、「動衛研・疫学グループ」の一員として、身の引き締まる思いがした今回の ISVEE conference 参加となりました。

次回以降の第14および15回 ISVEE conference は、メキシコ（2015年）、タイ（2018年）で開催されることがそれぞれ決定しています。特に第15回のタイですが、アジアの国が主催国になることは、1985年のシンガポールでの第4回以来、30数年ぶりのこととなります。アジアの一員、またタイと動衛研の長年の関係を鑑みても、今後何らかの要請があるかもしれません（写真2）。その際は、可能な限りの協力ができるよう、これからも視野を広く持って研究、業務を推進していこうと思います。